

地名の由来と史跡と文化財

(加茂白鳥地区編)



石塚（大福山）白鳥神社

上総の国いちはらの歴史を知る会

(ふるさと市原をつなぐ連絡会会員)

令和3年4月編集・製作

まえがき

人類は、今から700万年前にアフリカ大陸でサル類（チンパンジー）から枝分かれして「二足歩行の人類」となった。その後徐々に進化し約10万年前に一部の人類がアフリカを出ていくつかの人種に変化し大陸に住み着きました。

旧石器時代（先土器時代・無土器時代）～紀元前1万4千年前頃、我が国にも大陸から渡り来て住み着いたと思われます。その頃の日本列島はユーラシア大陸と地続きであり、彼らはマンモスやナウマン象、大角鹿などの大型動物を追いかけて日本列島にやってきた。食料調達には、主に狩猟や採取を行い、石を打ち砕いて造られた打製石器を使用した。食器などはなかった。

私たちの住みます「いちほら」にも人が住み始めて3万年の歳月が過ぎ、いくつかの大規模な集落が出来てきました。そして弥生時代になると大陸から稲作が持ち込まれ、肥沃な土地では稲作が行われるようになり、権力者による統治が始まった頃と思われます。その中で、大変興味深い説があります。縄文時代の頃に、日本列島に太平洋南方より現ポリネシア語（マオリ語）を話す民族が渡来し、住み着いた人たちが初めて地名を付けたという説です。それらの古い時代に付けられた今とあまり変わらない発音で、今も多く使われています。その中でも「古事記」や「日本書紀」などの古典や日本語の中にも、多くの現ポリネシア語源の言葉を見ることができますが、文字で表すものはありませんでした。

しかし弥生時代になると朝鮮半島より渡来した人により漢字が伝わって来て、今まで言葉で伝えられていた呼び方に、適当な漢字を当てはめたものです。例えば、日本の象徴の山「富士山」は、マオリ語では「フチ（HUTI）」「引き上げられた山、または釣り上げられた山」という意味となります。そして、浅間神社は熊野神社と並び最古の部類の神社とされていますが、富士山の神を祀る「式内富知（ふち）神社」が最も古い神社とされています。

縄文時代には、争いごとは少なかったと言われていたと言っていますが、水稻耕作が始まった弥生時代になると「定住民」が増えることにより、土地の利権争いが起き、古くから住んでいた縄文人は弥生人に圧倒されることになった。但し、古くからあった地名すべてが「現ポリネシア語（マオリ語）」という訳ではありません。

北海道には「アイヌ民族」のアイヌ語があり、沖縄には「琉球民族」が話す「琉球語」が存在する。

また、それぞれの地方には「方言」があり、その地方特有の言葉があります。

参考ですが、古来より「サ」が付いた名には「神様」に関係したものが多く見られます。

例えば、神社の敷地内は「境内（ケイダイ）」という聖域と一般の地を分ける「さかいめ」があり、神様が山から「さと（里）」に下ってくる道を「さか（坂）」と言います。また、祀りの際の神様の貴賓席を「さじき」と呼び、庶民は地面の芝に座ったので「芝居」という言葉が生まれたと言われています。

今回は、上総国市原郡内の中央部に位置します「加茂白鳥地区」の地名の由来と、その地にある史跡や文化財などを紹介します。



市原郡内の白鳥地区の地名の由来

千葉県の名の由来

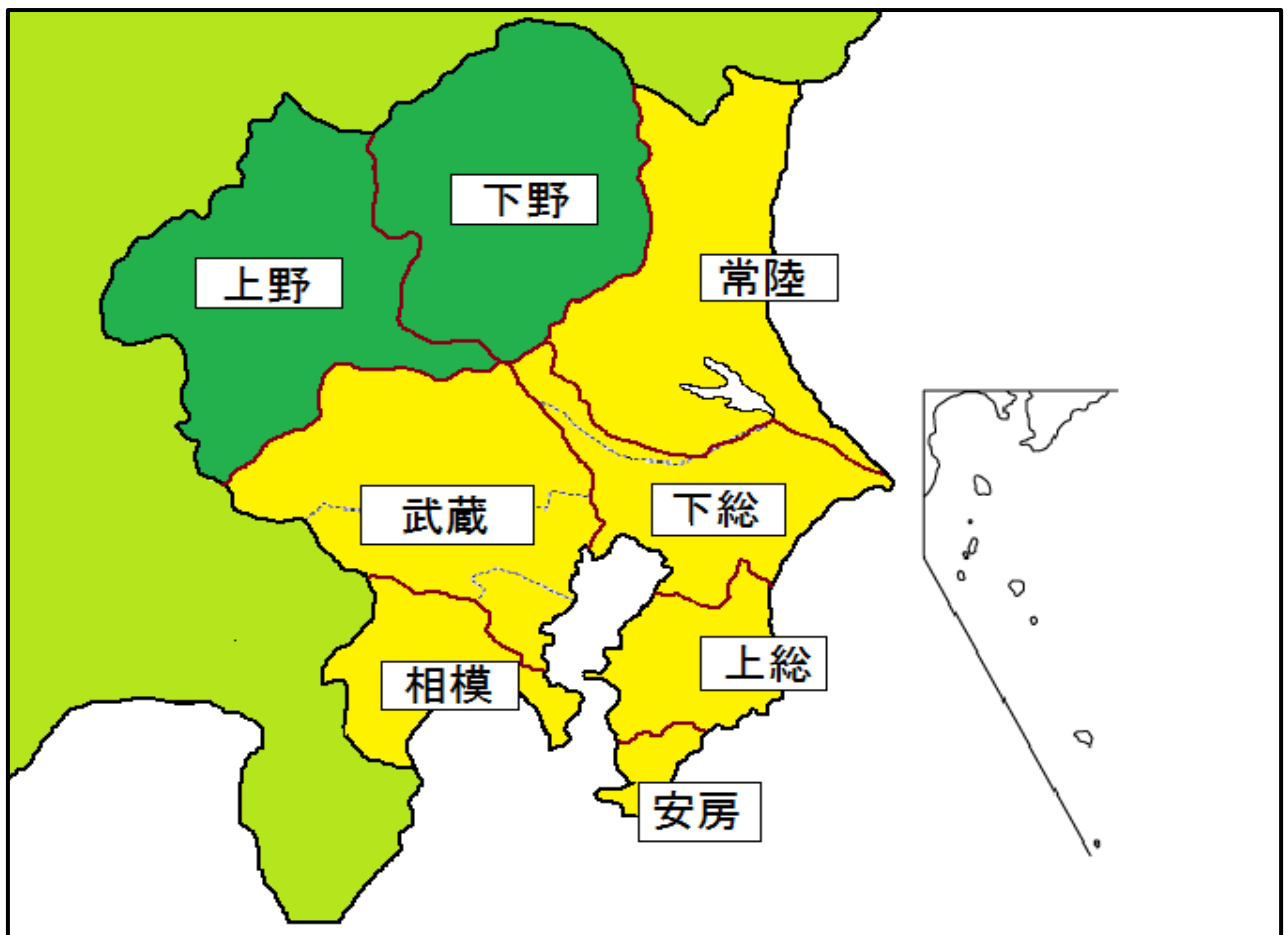
千葉県は江戸期までは総国（ふさのくに）と呼ばれており、茨城県南西部の一部と埼玉県東部の一部も含まれていました。この地域は7世紀後半の令制国の建置により、上総国と下総国が成立しその後養老2年（718年）に上総国から4郡が分かれ安房国が誕生した。

「総」の語源は、「古語拾遺」によると、「天富命（あまとみのみこと）」が安房国から齊部氏を率いて東上し、麻を植えたところ、良い麻が生えたので、総（麻）の国としたという説と、「風土記逸分」によると「総」とは木の枝を言い、昔この国に大きな数百丈のクスの木が生えていたが、大凶事との占いが出たので切り倒したところ、南に倒れたので、上の枝を「上総」と言い、下の枝を「下総」と言ったと記されているが、いずれも根拠が弱く、他にも「塞ぐ」からで「山などが周囲にある土地」や「ふし」の転訛で「高い所」の意味する説などがあるが、現在では朝廷の都に近いほうが上であり「上総」と付けられたという説が正しいと考えられる。

なお、「ふさ」はマオリ語で「フ・タ」で、「浸食された丘陵がある地域」の転訛と訳します。

「和名抄」に、下総国相馬郡布佐（ふさ）郷があり、現我孫子市東端の布佐の地域と思われる。上総国には、市原（国府所在地）・海上・畔蒜（あびる）・望陀（ぼうだ）・周淮（すえ）・天羽・夷隅・埴生・長柄・山辺・武射の11郡がある。

下総国には、葛飾・千葉・印旛・埴生・匝瑳・海上・香取・相馬・猿島（さしま）・結城・豊田の11郡が、安房国には、平群（へぐり）安房・朝夷（あさひな）・長狭の4郡で国造りがされた。市原郡は「伊知波良」と書き、中世には市西郡と市東郡に別れ、山田郡も郡域内にあったと思われます。国府の所在郡でもあり郡内には、海部（あま）郷・市原郷・湿津郷・江田郷・菊麻郷・山田郷の6郷があった。江戸期には、このほかに、海北郷・佐是郷など、旧海上郡域も併合された。



市原市の地区別地図

020/9/26

行政区-scaled.jpg (1829×2560)



市原郡内地名の由来と神社、仏閣、史跡、文化財の紹介

※ アンダーライン部は、古代マリオ後（現ポリネシア語）での表現を日本語に転化したもの。

上総国市原郡の6郷

1・海部郷（あまのごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「安万」東急本は「阿万」と呼ばれており、海士有木に比定されている。漁業、航海を中心とした職業的品部に由来する地名。

2・市原郷（いちはらごう）

平安期にあった郷で、市原・能満・門前・郡本付近に比定されている。地名の「イチ」は集落の意味、または「稜威」（いつ）の転嫁で美称か。櫟（いちい）の繁茂する原野の意味とする説もある。

※藤井は、万治2年（1659年）に郡本より分村したのと、山田橋は元は山田郷に属していたので、市原郷には含まれなかった。

3・湿津郷（うるつごう）

平安期にあった郷で、高山寺本の訓は「宇流比豆」、東急本では「宇留比豆」。市原市潤井戸付近に比定される。地名の由来は、「ウルヒ（湿）・ツ（場所）」と考えられる。村田川の上流で、豊富な湧泉があることから命名された地名と思われる。

4・江田郷（えだごう）

奈良期にあった郷で、高山寺本・東急本ともに訓は「衣多」。市原市吉沢付近は古くは江田郷と称したと伝えられ、当郷の比定と思われる。他に、市原市八幡付や市原市江古田などを含む養老川上流右岸の広大な地域を郷域としている。

5・菊麻郷（くくまごう）

平安期にあった郷で、東急本では「菓麻」と書く。訓は、高柳寺本・東急本ともに（久々万）。

市原市菊間付近に比定されている。地名の由来は、「くくまった（包み込まれたような）・地」の意味

6・山田豪（やまだごう）

平安期にあった郷で、東急本の訓は「夜万多」。市原市山田付近に比定されている。

地名の由来は、「山を開いて田を作ったところ」の意味か、「山間の田」あるいは「山処（やまど）」の転嫁で、「山のある処」とも考えられる。

白鳥地区 (朝生原・石神・石塚・大久保・折津・国本・菅野・月崎・戸面・柳川)

概説

この地区の内、大久保、石塚、菅野、国本、柳川、折津の7ヶ村は中古依頼高滝郷に属し、天文年間(1532年~1554年)に、里見氏の支配に属していた。その後天正18年(1590年)からは徳川の家臣が交代で支配し、慶長7年(1602年)からは久留里藩領(土屋氏)、一時幕府領、酒井氏領を経て寛保2年(1742年)から再び久留里藩領(黒田氏)となり、明治に至り、鶴舞藩井上氏の支配に変わり、鶴舞県の管轄地となる。朝生原・戸面・石神の3ヶ村は、戦国時代の里見氏、天正年間(1573年~1591年)は勝浦の上村氏、宝暦6年(1756年)からは武蔵国岩槻藩大岡氏の所領を経て明治に至り、宮谷県の所轄となる。同4年には全村が木更津県の所轄となり、同6年に千葉県に属した、明治11年には市原郡役所の所轄になり、郡区町村編制施行に伴い3つの村連合を組織したが、同20年市町村制の実施により全村合併し白鳥村となった。白鳥の地名の由来については、石塚の大福山に日本武尊の伝説に関する白鳥神社があり、日本武尊逝去の際における白鳥霊異の伝説に因んで付けられたもの。

朝生原 (あそうばら) 神社・寺院・史跡文化財・城址 賀茂神社・白山神社・山神社・八坂神社
宝林寺(曹洞宗)

麻生原とも書く。江戸期は麻生原村。久留里城主里見義堯の娘、種姫の夫であった正木久太郎が討死となったことから、当地の宝林寺に入り後世を弔ったと言い、付近には天(尼)津前や尼住居などの地名が残っている。地名の由来は、「あさ(崖崩れ・湿地)う((~なったところ)・はら(原))で、崩れるような崖のある山間の平坦地という意味。

賀茂神社 (かもじんじゃ)

所在地 市原市朝生原字上の山584番地
創建時期 不詳
祭神 別雷命
宮司 宮原 義実
由緒・伝説 旧村社・創建年代・由緒不詳

賀茂神社の本殿の建物



参道入口に建つ鳥居と長い石段



本殿内部に祭壇と祭禮花飾り



本殿右側の風景

八坂神社 (やさかじんじゃ)

現在は所在不明となっている。

所在地 市原市字天王998番地に登記はされているが、不明

山神社 (さんじんじゃ)

所在地 市原市朝生原字大西618番地
 創建時期 不詳
 祭神 大山祇命 神紋 左三つ巴
 宮司 宮原 義実
 由緒・伝説 旧村社、創建時期・由緒不詳。

山神社の本殿の建物



境内入口の鳥居。奥に本殿



本殿入口と上に掲げられる扁額



本殿内部の祭壇と左側に神輿



歴史を感じされる石燈籠



出羽三山信仰の供養塚

本殿外側に飾られる彫刻額



白山神社 (はくさんじんじゃ)

所在地 市原市朝生原1002番地
 創建年代 不詳
 祭神 不詳
 宮司 宮原 義実
 由緒・伝説 創建年代、由緒不詳。拝殿内に本社と小社二社が祀られる。

白山神社の本殿の建物



境内入口の鳥居と長い石段



本殿の祭壇と左右に2社祭壇



本殿入口の柱に獅子と像の彫物

富士山宝林寺 (ふじさんほうりんじ) 曹洞宗

所在地 市原市朝生原783番地

創建時期 永禄7年(1564年)に開山

本尊 不詳

住職 千葉 公慈

由緒・伝説 寺伝によると、館山城主で後に久留里城主の里見義堯公の長女の里見種姫は、大多喜城主正木大膳亮時茂の長男、正木大太郎に嫁いだ。永禄7年1月の第二次国府台合戦で敗れ25歳

で戦死した。種姫は悲しみのあまり尼僧となり、永禄7年に朝生原の字坊山に七伽藍を備えた宝林寺を創建し、亡夫の冥福を祈ったという。開山となる初代住職には駿河国から壽陽大和尚を招いた。天正17年(1589年)6月15日に種姫は48歳で病死され、戒名「宝林寺殿慶州妙安大前定尼」とし、裏面には「禅尼里見里見義堯ノ長女種姫也正木太郎・・・廿五歳戦死。種姫守貞創建置種林寺於白濱作尼而居焉里見氏以十五石地付之後避圓書之乱到当寺云々」と記載されている。寺の近くの山の中腹には、根姫が住んだ草庵と洞窟があったと言い、字天津前(尼津前の転訛か)の地名が残っている。

種姫は、滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」の伏姫をモデルにしたものと言われている。

宝林寺は、延享2年(1745年)に伽藍を焼失したが、寛政2年(1790年)から住職二代に渡り熱心な発願により本堂が再建され、現在に至る。

本堂は、正面九間、奥行七、五間の寄棟造りで、玄関脇の花頭窓は禅宗様式。格式のある須弥壇は、ケヤキ材に彫刻を施した秀作です。本堂の天井168枚の絵画は色あせているが、見事な芸術作品と言える。



宝林寺の本堂の全景



宝林寺の入口の山門



本堂入り口と富士山の扁額



境内にある手水鉢と建屋



境内に建てられている鐘楼



種姫の埋葬されている墓地



境内に祀られる梅花観音石像

石神 (いしがみ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 羽雄神社

江戸期は、石神村。宝暦2年(1752年)に朝生原村から分村した。

地名の由来は、石棒を神として祀った事にちなむ。

羽雄神社 (はねおじんじゃ)

所在地 市原市石神字板谷ケ崎225番地

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳

羽雄神社の本殿の建物



境内入口の石の参道と鳥居



羽雄神社の入口正面



本殿内部に祭壇と神輿が鎮座

石塚 (いしづか) 神社・寺院・史跡文化財・城址 白鳥神社・

江戸期は、石塚村。地名の由来は、役の行人が渡来し法華経を小石に書いて塚に埋め、そこに松を植えた事にちなむとする説がある。「いし(石)・つか(高くなっている所)で、石の多い山という意味。

白鳥神社 (しらとりじんじゃ)

所在地 市原市石塚字杵ケ畑546番地
(大福山頂上)

創建時期 一説では正治元年(1199年)に源頼朝が勧請したという。

祭神 日本武尊

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。もとは蔵王権現社と呼ばれていたが日本武神社となり、白鳥神社となった。日本武尊が鹿野山の賊を退治した折り、大福山に逃げた残党を追撃した古跡により祀ると言い伝えられている。建久8年(1197年)に源頼朝が霊夢により大福山に蔵王権現を祀ろうとしたが果たせずに命を落としたので妻の政子が遺命を奉じて神鏡を奉納し、当山に蔵王権現を勧請したという。一説には正治元年に源頼朝が勧請したとも言われる。

白鳥神社の本殿の建物



境内入口に建つ鳥居





境内に祀られる古い石の狛犬



本殿の建物。右側が幣殿と拝殿



時代を感じる手水鉢



境内に祀られる摂社の祠



本殿の上面に埋め込まれている彫物

大久保 (おおくぼ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 浅間神社

江戸期は、大久保村。地名の由来は、「おお(美称)・くぼ(窪)」で、山間の窪地を指したものが。

浅間神社 (せんげんじんじゃ) 現在所在が不明

所在地 市原市786番地に登記はされているが不明。

折津 (おりつ) 神社・寺院・史跡文化財・城址 大山祇神社・熊野神社・

江戸期は折津村。明治7年に根向村・芋原村が合併した。

地名の由来は、「おり(降)・づ(処)」で、山崩れがあった処を指したものが。

大山祇神社(根向村) (おおやまづみじんじゃ)

所在地 市原市折津字作畑24番地

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建時期・由緒不詳

大山祇神社の本殿



入口に建つ鳥居と長い石段



大山祇神社の本殿建物



境内に祀られる石の祠

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市折津字芋原804番地
創建時期 不詳
祭神 伊弉册命
宮司 宮原 義実
由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。

熊野神社の本殿建物



境内入口に建つ鳥居



本殿の右側に建つ社



右側社の中の内宮の祠



鳥居の右に祀られる青面金剛像



境内に祀られる祠ですが、祀り神の名は読めない



青面金剛の庚申塔について (せいめんこんごう・こうしんとう)

青面金剛というのは、この三尸 (さんし) の虫を押える力を持った金剛童子で、青い顔で憤怒の形相をしている。しばしば、三猿 (見ざる・聞かざる・言わざるの3匹の猿) を従者としている。

60日に一度回ってくる庚 (かのえ) 申 (さる) の日には、一晚中寝ないで徹夜をする。これを庚申待ちという。

庚申の日というのは帝釈天の縁日です。これは、中国の道教に由来する習俗で、人の身中には三尸という三匹の虫が住んでおり、帝釈天の縁日の夜、人は眠っている間に、この虫がこっそり身体の中から抜け出して天に昇り、その人の犯した罪を帝釈天に報告し、帝釈天はそれに応じてその人の寿命を縮めるので、この夜は眠らないで虫を抜け出せなくするという。

この習慣は平安時代に我が国に伝わって来て、江戸時代に全盛となり

明治になってからもなお行われていた。この青面金剛を御祭りしている石塔が庚申塔で、これには「庚申」「青面金剛」「猿田彦」(神道では青面金剛の代わりに猿田彦を祀る) などの文字を刻んだ文字塔と、相面金剛の像を刻んだ彫刻塔がある。



大山祇神社 (上の内根村) (おおやまづみじんじゃ)
 所在地 市原市折津字上の内根1069番地
 創建時期 不詳
 祭神 大山祇命
 宮司 宮原 義実
 由緒・伝説 旧村社。創建時期、由緒不詳。
 元は山神社。大正7年(1918年)に
 天津日神社(大日靈命)を合祀した。

大山祇神社の本殿建物



長く急傾斜の石段の上に本殿



本殿内には祭壇が祀られる



境内に祀られる庚申塔の石仏

国本 (こくもと) 神社・寺院・史跡文化財・城址 浅間神社・金蔵院(真言宗豊山派)
 江戸期は、国本村。地名の由来は、「くぬ(くきぬきの縮語)・もと(麓)」の変化したもので、山頂崩壊地の麓という意味。

註・「くきぬき」とは、木材に貫通する穴をあけてそこに別の木材を通して固定することで、柵の意味としても使われる。

浅間神社 (せんげんじんじゃ)
 所在地 市原市国本字藤原468番地
 創建時期 不詳
 祭神 木花咲耶姫命
 宮司 宮原 義実
 由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。
 昭和2年(1927年)に八幡神社
 (誉田別命) 山神社(大山咋命)を合祀。

浅間神社の本殿の建物



境内入口の鳥居と先の参道



本殿内の内宮と祭壇



境内に祀られる保食神の石碑



境内に正徳6年文化3年の石像



境内に祀られる祠。祭神の名が読めない。



霧尾山金蔵院 (きりおさんこんぞういん) 真言宗豊山派

所在地 市原市国本96番地

創建時期 慶長6年(1606年)頃

本尊 不詳

住職 坂元 敦子

由緒・伝説 慶長年間に開山創建された。本堂の他に観音堂なども建てられており、境内には文政年間の石仏や他の寺院の墓石などが安置されている。

金蔵院の本堂建物



本堂の入口と上部の扁額



境内に建立されている観音堂



観音堂の入口上部の扁額



観音堂の内部。仏像を安置



金蔵院境内入口の門柱



地藏様や墓石が来場者を迎える

月崎 (つきざき) 神社・寺院・史跡文化財・城址 熊野神社・永昌寺(曹洞宗)月崎腰城・月崎鶯(ミサゴ)城

江戸期は、月崎村。

地名の由来は、「すき(剥ぎ)・さき(山の先端)」で、地滑りなどで崩壊した土砂の先端という意味。

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市月崎字広畑273番地

創建時期 不詳

祭神 伊邪那岐命

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建年代・由緒不詳。

明治23年(1890年)山神社

(大山祇命)、明治41年(1908年)

白幡神社、大正11年(1922年)に天神社(菅原 道真)を合祀している。

熊野神社の本殿の建物



神社入口の鳥居と扁額



境内に建つ神輿蔵



出羽三山信仰の供養塚

霊窟山永昌寺 (れいくつさんえいしょうじ) 曹洞宗

所在地 市原市月崎1098番地

創建時期 正安元年(1299年)10月

開山 継巖永胤禅師(臨濟宗)

本尊 不詳

住職 星野 英哲

由緒・伝説 永昌寺縁起に「白猿伝説」があります。
それによると、鎌倉時代の臨濟宗の僧・

断巖永胤禅師が里人を困らせていた峰岳の岩窟に住む老白猿を化度し里人を救った。

里人は禅師の高徳に感謝し、相談して峰の南麓に一寺を建立し、禅師を招き開闢の祖とした。その後、大風雨の災害で文明14年に現在の地に移り再建された。

その後、経年の為堂宇などが傷んできたので、君津群馬來田村妙泉寺の中興開山太年伊椿禅師が当山を再興し、中興一世となった。その際に臨濟宗から曹洞宗に替宗した。

永昌寺の本堂の全景



永昌寺境内入口の門



境内入口に歴代の墓石群



本堂前に建つ二階建ての山門



山門の左右には阿吽の木造



本堂内部には祭壇が祀られる



境内に建つ鐘楼と釣り鐘

月崎腰城 (つきざきこしじょう)

所在地 市原市月崎

創建時期 室町期後期天正年間と思われる。

築城主 里見 義頼

説明 月崎腰城と鶯(みさご)城は、琵琶首館の背後にある城址で、ともに琵琶首館の詰め城、あるいは監視所として用いられたものと言われる。腰城は、琵琶首館の300mほど西側にある。郭や土塁・空堀などが残っているという。その先500m程の北側にみさご城がある。

鶯城の方には、郭や空堀、虎口、井戸なども残っている。

この二つの城址は、比高60m程の峻険な山上にあります。山頂付近の尾根沿いにはずっと道が付いており、中心部近くまで車で行けるが入る道が分かりにくい。

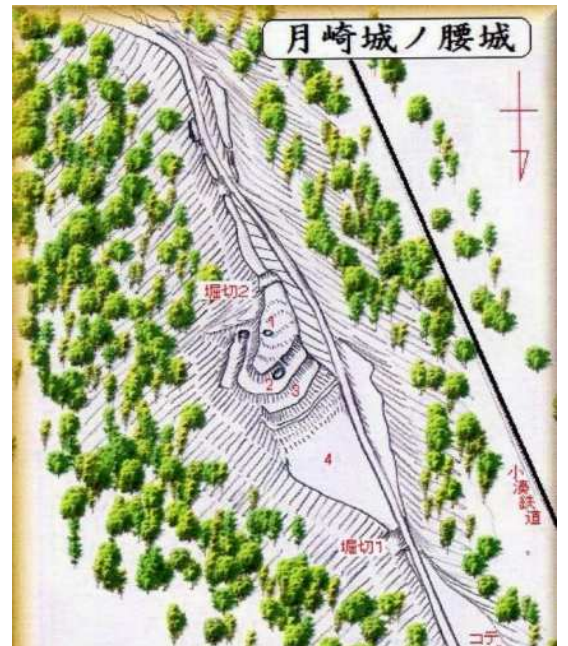
堀切1は本来、細尾根になっている部分を掘り切ったもので、深さ4m、幅は7m程あるが、現在は埋め立てられ道路になっている。

その先の割合広い平地があったと思われる所が4の郭にあたる。その先の左側の山の奥に入り込んでゆく道があり、山の斜面に沿って付けられた道であり、下の4の郭から6mほど高い位置にある。上の腰曲輪からは4m程低い位置です。2の脇には円形の窪みがあり、井戸の跡のように見える。同様の窪みが1郭内部やその東側にもあったが、井戸ではなく後世に改変されてできたものかもしれない。山頂部にある1郭は南北に長く長軸40m程あり、削平されているが雑である。

主郭でありながら、雑な削平なのでこの城の性格を物語っている。1郭の背後には堀切2がある。この城は削平も甘く城壘もきちんと加工していないが、肝心な所にきちんと堀切が掘られているので、城址と確信が持てる。この城の中央を通っている道が昔の街道であったとするならば、この街道を押える番所の機能が課せられた使命であったと思われる。

1郭の背後には堀切2がある。この城は削平も甘く城壘もきちんと加工していないが、肝心な所にきちんと堀切が掘られているので、城址と確信が持てる。

この城の中央を通っている道が昔の街道であったとするならば、この街道を押える番所の機能が課せられた使命であったと思われる。



キャンプ場の南側にある深さ4m、深さ7mほどの堀切1の跡



腰曲輪 2. 幅 6 m 程で削平跡がある



1 郭の内部で、削平は荒い



1 郭の南側にある堀切の 2

月崎鶯城 (つきざきみさごじょう)

所在地 市原市月崎字みさご台

築城時期 室町期後期天正年間と思われる

築城主 里見 義頼

説明 月崎鶯城は腰城と同様な目的で築かれた城と言われている。みさご城は城と言っても 1 郭を中心とした単郭構造で、1 郭は割合広く長軸で 100 m 近くあるが、きちんと削平はされてはいなく、結構傾斜した地形となっている。北側先端が一段高くなっているが、微妙な地形でメリハリの利いたものではない。

また、西側には、B の土塁状地形があるが土塁としては緩やかなもので、自然地形とも思えます。

1 郭の南側の下には切通しの通路 C が造られており、この道路は城壘下の位置に当たるため、一見すると横堀と見える。この通路は 1 郭の東南端に接した上で北側に降りる D の道と、東側に下りる B の道と分かれている。B の部分も見ると堀切のように見える。みさご城は、城と言っても規模も小さく、これで果たして城と言えるかは不明ですが、付近には「堀切」「堀切久保」「浦白」といった地名が残っているので、月崎腰城の裏の城、あるいは琵琶首城の裏の城という意味合いの城とも思える。



北側から見た比高 30 m 鶯城址



B の土塁状の部分



1 郭の南下の C の横堀状の地形

江戸期は戸面村。朝生原から分村して出来た。

地名の由来は、「と (山の尾根)・つら (連)」で、長く続く尾根を指したものの。

日枝神社 (ひえじんじゃ)

所在地 市原市戸面字後川378番地

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。

日枝神社の本殿の建物



境内入口の鳥居と石段の参道



本殿の入口と上部の神社の扁額



本殿内部に祀られる内宮



鬼子母神様の石像と祠



回廊の左右に飾られる龍の彫刻



本殿の右軒下に火事除けの蜂の巣

熊野神社 (くまのじんじゃ)

所在地 市原市戸面字有木601番地

創建時期 不詳

祭神 石凝姥命

宮司 宮原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建年代・由緒不詳

熊野神社の本殿の建物





石段の参道の先に朱塗りの鳥居



本殿入口の上部に神社名扁額



本堂内部に祀られる三社の祭壇

梁川（やながわ） 神社・寺院・史跡文化財・城址 大山祇神社

江戸期は、柳川村。大久保村枝郷

地名の由来は、川端に接し、往時柳の木がたくさんあった事にちなむ。

「やな（斜面）・かわ（川）」で、斜面の側という意味。

大山神社（おおやまづみじんじゃ）

所在地 市原市柳川字下代99番地2

創建時期 不詳

祭神 大山祇命

官司 官原 義実

由緒・伝説 旧村社。創建年代、由緒不詳。
元は、大山祇神社でした。

大山神社の本殿の建物



石段の参道の先に建つ鳥居



参道手前の地蔵の祠と？石物



本堂内部に内宮が祀られる



参道入口の左に建つ地蔵の祠



お堂の中に鎮座する地蔵様



境内に祀られる祠、神名は不明

本資料は、次の資料を参考に作成しました。

- ・市原市埋蔵文化財センター遺跡ファイル
 - ・ちょっと便利帳（日本の元号・年代早見表）
 - ・全国遺跡報告総覧
 - ・日本の城郭・城址（千葉県版）
 - ・寺社にまつわる伝説（市原市 その2）
 - ・市原市・宗教法人一覧
 - ・市原の城郭と国府跡をたずねて
 - ・Wikipedia- 市原郡
 - ・市原市歴史と文化財シリーズ
 - ・いちはら歴史の旅人
- ・そのほかに、紹介した寺院・神社の関係者の方々の協力を頂きました。

加茂白鳥地区の地名の由来と史跡と文化財

発行・編集 市原の歴史を知る会

住所 市原市能満1020番地1

連絡先 090-3545-1113